

僕はみんなからたくさんのお話を教わりました。

自分に信念を持つ力。自分の弱さを見せる力。他人や社会のせいにならない力。

自分の意見を嘘偽りなく言う力。多様性を認め仲間の全てを受け入れる力。

自分自身に満足し他人と比較したり、競争しない力。「こうなければならない、こうあるべきだ」に惑わされず自分自身のために目的を持つ力。昨日を悔やまず、今日を始める力。いつもフルボリュームで自分をぶつけ、どんな時も楽しく生きる力。

すべては幸せを感じるために　　～やまなみ物語～

人口 90,458 人、「甲賀流忍者」「信楽焼」「東海道五十三次の宿場」で知られる滋賀県甲賀市に私たちのやまなみ工房があります。やまなみ工房は 1986 年に 3 名の利用者からスタートし、現在は 87 名の方が通所しています。

利用される多くの方には重度の知的障害があり、一般就労することや、中には地域の福祉事業所を希望しても受け入れが困難だと判断された方もいらっしゃいます。

やまなみ工房はこれまでご利用を希望される方を一人もお断りをしたことがありません。

僕たちスタッフは彼らと出会い、一人ひとりが一日穏やかに、自分らしく、どうすれば楽しく過ごせるだろうと考えます。

今から 30 年も前のことです。僕たちはいつしか狭い作業室を飛び出し、毎日ドライブしたり散歩をしては、初めて行く場所、初めて見るものに出会い、やがて粘土をしたり絵を描く事に夢中になりました。

そこには納期もノルマも失敗も不良品もありません。

言葉でのコミュニケーションが苦手な彼らにとって粘土や絵で自由に自分の気持ちを表現することは、僕たちの対話を叶える大切な素材でした。

ただやまなみに通う方たちがもともと粘土や絵で何かを表現することが好きだった訳ではありません。

特別な才能があったわけでもありません。

今もそうです。

実はスタッフの中にもアートを専門に学んだ人や、いわゆるアート好きな人もいないのです。

ですからこれまで手を加え、口を出し、アートを教育的に指導したり、描く事や作る事を強要した事もないのです。

そもそも僕たちは施設にアートを取り入れるなど考えたこともありませんでした。  
誰かが注目するような素晴らしい作品を描いてほしいなどと求めたこともありませんでした。  
ただ目の前の彼ら自身が喜びを感じ、夢中で向える事が欲しかっただけなのです。

僕自身、美術や芸術なんてことは今もさっぱり分からない自信があります。  
ですから彼らの表現を美術的な価値基準に当てはめ優劣を付けたり、評価をすることなどできる  
はずがありません。  
唯一僕が自信をもって言えるのはただ一つ。  
彼らから見えるもの、彼らから聞こえるもの、彼らから感じる事が出来るもの。  
僕は彼らの表現が大好きだと言う事。それだけです。

僕は以前、彼らの本心に向き合うことを疎かにし、一般社会における就労を理想と掲げ、少しでも  
社会に適応できるよう、また工賃が少しでも向上し経済的に自立する事だけに捉われていまし  
た。  
働くために必要な教育的で反復的な訓練は、就労を目的としていない方には苦痛を与え、大きな  
制約と制限をもたらしたことと思います。

反省しています。  
やまなみ工房という組織の中のシステムに彼らを当てはめ、支援者の予定を無難にこなす事が目  
的になり、「個」の存在を見落としていたことを。

向かう先に目指すのは、彼らを取り巻く人々の理想ではなく、彼ら自身の希望。  
その人らしくあることを尊重し、その希望を叶える事なのです。

施設長だからと言って、そもそも僕には彼らの上に立ち、彼らの好きな事を奪い、やりたくない  
事を無理矢理させる権利など、どこにもありません。  
彼らには彼らの感じ方や考え方があり、それぞれの生き方があるのです。  
スタッフも同じです。  
僕にあるのは彼らを笑顔で満たしたいという一方的で熱狂的な好奇心だけなのです。

彼らには本来一人ひとりに私はこれをする事で幸せなんだ。があります。  
しかしその多くは対価に結びつかず、社会の中で有用無用のふるいにかけて、彼らの価値観や  
本質でさえ見失われることが殆どです。

日々の営みの中で気づいた事、それは一人ひとり自らに価値があるという事です。

福祉やアートと言った枠組みの中で彼等の行為を見るのではなく、彼らが喜びで満たされ真剣に  
向えるものが今ここにあるのか。

その事を常に考えたいものです。

ありがたいことに、今では国内外において多くの方が彼らの作品や行為に注目するようになり、「凄いですね」と驚きや感動の気持ちを伝えてくれます。ただ、彼らを自分より劣った存在と見なし「障害者なのに凄い」といった哀れみや蔑みの気持ちがまだまだ存在するのも現実です。

彼らが素晴らしい人格者であることは間違いのない事実です。

もし障害者と呼ばれている方々の事を無意識のうちに、自分より不完全なものという見方をする人がいるならそれは大きな間違いで、その過ちこそが人と人の間に障害を生み出してしまうでしょう。

多様性や互いの違いを理解する事と、彼らを特別な目で見るとは全然違います。

「障害者なのに凄い」や「障害者だから凄い」と思われることは嬉しい事ではありません。僕たちは彼らが特別視されることを求めているわけではありません。

人として対等な関係を求めているのです。

表現活動とは誰にも歪められず自分自身の世界を築く事だと思います。

分かりやすい絵画や陶芸だけが表現や作品ではありません。

僕の概念からはよく分からないものの中にも、その人らしさや唯一無二の輝きを放つものもあるのです。

その独特の発想と価値観に常に寄り添う事が僕に求められていることなのではないでしょうか。

彼らから学んだのです。

芸術とは何も優れた作品を生み出すことではなく、社会の賞賛や評価を気にすることなく、自分の愛する世界をひたすら築くことであると。

彼らの苦手なところをネガティブに見つめるのではなく、得意な事、素敵などところを探しながらこれからも彼らと彼らの表現、そして作品を社会に発信することで、新しい価値観や芸術観が創りだされることを願っています。

福祉だとか、障害者だとか、アートかどうかだとか、そんな何かにカテゴライズする枠組みや言葉が必要とするのではなく、誰もが違いを認め尊重し、誇りを持って活躍できる場を、そして社会をデザインすることが重要だと思います。

僕たちやまなみ工房が目指しているのは、作品に対する芸術的評価の高まりだけではありません。その事により対価を受け取る事だけでもありません。

全ては彼らへの正しい理解であり、障害のある人もない人もともに生きやすい心優しい豊かな社会です。

一般社会の常識や価値観、ましてや芸術的価値に彼らや彼らの作品を一方的に導く事ではなく、社会に新しい芸術観や価値観を創りだし、多くの障害者が生きる尊厳を獲得する事なのです。

「本人はいったいどう思っているのだろう」

これからも大切にすべきことは人間関係であり何より信頼関係です。

誰かが上位者に立つのではなくお互いに敬意をもって過ごす。

これがなければ何も生まれません。

信頼関係が最も重要であり、その上に様々な花が咲くのです。

自らが大切な価値ある存在である。そう感じる事の出来る日常の中におかれてこそ、生きる喜び、表現する喜びが生まれるのではないのでしょうか。

安心できる時間と空間。優しい眼差しと嬉しい言葉、美しい真心が全てです。

これからも障害のある人たちの豊かな日常と生きがいを保障し、その日常から生まれる素晴らしい作品や人間性を、前例にとらわれることなく幅広く社会、そして世界に発信することで、多くの障害者の自己実現と社会参加の機会を高めること。

障害者の自立支援とは、彼らの苦手なことを押し付け、社会の物差しに当てはめ、希望に反して独り立ちを促すのではなく、社会、そして人々の障害者に対する意識を正しく導くことではないのでしょうか。

吉川くんや山際くんと初めて粘土に触れたあのころに比べると随分見える景色は変わりました。

彼らを絶え間なく別の何かに変えようとする世の中で、目の前の彼らに対し、一方的な抑制をかける事をせず、制約と制限を与える全ての事を取り除き、ありのままの彼らが今日も笑顔で満たされ輝きを放ち続けられる。そんな環境をこれからも誇るべき26人の最高のSTAFFとともに整え続けたいと思います。

それぞれのHAPPYが、そして可能性が無限に広がること。

僕たちはなぜ今この仕事をしているのか。

僕たちの役割はなんなのか。

僕たちはどうあるべきなのか。

すべては幸せを感じるためです。

そして今日も考えます。  
僕たちは今、彼の希望に向かっているのかと。

やまなみ工房 山下 完和

日々の営みの中で気づいた自らに価値があるという事。  
表現活動とは愛してやまない自分自身の世界を築く事なのですね。

描きたいように描いてみよう。つくりたいようにつくってみよう。君は君らしく生きてみよう。